

聖書：マタイ 9：18～26

説教題：絶望か、希望か

日時：2019年2月24日（朝拝）

今日の箇所には二人の人が出て来ます。一人は最初の18節に出て来る「会堂司」です。ユダヤ人の会堂における礼拝や教育を取り仕切っていたリーダーにあたる人です。彼は自分の娘が今、死んだ！という状況にありました。他の福音書の並行記事から、その娘は12歳だったことが分かります。やっとここまで無事に育ち、人生はこれから！という時に息を引き取ってしまった。しかもこの少女は彼の一人娘でもありました。そのかけがえのない存在を失った彼がイエス様のもとにやって来てひれ伏し、「どうかおいでになって、娘の上に手を置いてやってください」と願い出ます。これを聞いてイエス様は立ち上がり、彼について行かれます。18節の最初を見ると、イエス様はこの時、人々と話していた最中だったようですが、彼の求めに対してすぐこのように答えてくださったイエス様の姿がここにあります。

もう一人は20節に出て来る12年の間、長血をわずらっていた女の人です。彼女についても並行記事から、多くの医者にかかったが、ひどい目に会わされて、持っている物をすべて使い果たした状況にあったことが分かります。そして直らなかったばかりか前よりもっと悪くなっていた。さらにこの長血の状態にある人は、レビ記15章によると汚れた状態にある人とされ、その人が座ったものも、また着物も、それらに触れた人々もみな汚れると言われていました。ですから彼女は社会生活がままなりません。人々の間に出て行くことができません。公の礼拝にも出られません。そんな状態が12年間にも渡って続き、直る見込みがない状態にありました。

このように二人とも「絶望」の状態にあった人でした。その彼らがそれぞれイエス様のところへやって来て素晴らしい解決を得ます。この記事から私たちも自分に対するメッセージを学び取って行きたいと思います。

まず先に解決を与えられる長血の女から見て行きます。彼女はイエス様が会堂司の家に向かう時、イエス様の後について行く人たちに混じって後ろから近づきました。そしてイエス様の衣に触れさえすれば私は救われると信じて手を伸ばしました。なぜこんな方法を取ったのか。それは先に見た通り、彼女は宗教的また社会的に汚れた者として真

正面から近づいてお願いするということができなかったからです。あの長血の女だ！と人々に知られるような仕方ではイエス様に近づくことができない。そこで群衆の中に紛れ込んで、後ろからそっと近づいたのです。そして衣の房にでも触れば！という思いで手を伸ばした。

すると大変な不思議なことは、イエス様はその彼女の着物の房へのタッチを感じ取られたことです。他の福音書を見ると、イエス様は辺りを見回して「わたしにさわったのは誰ですか」と問われたと書かれています。弟子たちはその時、言いました。「群衆がみなあなたに押し迫っているのに、わたしにさわったのは誰ですかと仰るとは一体どういうことでしょうか？みんながさわっているのではないのでしょうか？」と。しかしイエス様はたくさんの方がご自分を取り巻き、ある意味で触れている状況の中で、ある信仰の特別のタッチを感じ取られたのです。

これは私たちにとってチャレンジとなる言葉ではないでしょうか。私たちはまさに今、多くの方々と一緒にイエス様を礼拝しています。ある意味でイエス様を取り巻いていた群衆のようです。そこで問うべきは、この私は長血の女のように生ける信仰によってイエス様につながっているだろうかということ。何となくイエス様のそばにいる、近くにいるということだけで安心し、満足し、イエス様との真の関係には生きていないということはないだろうか。沢山の人がイエス様の周りにいた状況の中で、イエス様の心に届く信仰の手を伸ばしたのは彼女一人でした。私はどうだろうかと問われるのです。

ある人は、しかし彼女の信仰はそんなに立派なものだったろうかと考えるかもしれません。着物の房にでもさわれば、という考えは迷信的ではないか。また自分の身を明かさずに、祝福をいただいたらこっそりこの場から立ち去ろうという考えは決して誉められたものではないのではないかと。確かにそれはそうかもしれません。足りない点、不完全なところは色々あったでしょう。しかしイエス様はそういう風には仰いませんでした。イエス様はそこに信仰があることを見い出して、むしろ賞賛されました。人間の医者誰も直すことができなくても、イエス様はこの私の問題を解決することができるかと心から信じたからこそ、彼女はこのことを決行したのです。人込みに紛れてでも何とかして近づき、せめて着物の端でもと思って実際に手を伸ばした。ここに真の信仰があります。そこでイエス様は「娘よ。しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました。イエス様はこうして彼女に、あなたがわたしの着物にさわ

ったから癒されたのではなく、あなたのわたしに対する信仰を通して、あなたは恵みを受けたのですよということをはっきりさせているのです。これはこれからもあなたはこの信仰に生きるように！という励ましでもあります。この時から、彼女は癒やされた、とあります。22節のイエス様の「救った」という言葉は、単なる肉体の癒しだけではなく、より包括的な神の救いを指す言葉です。彼女はこの信仰を通して、イエス様がくださる本当の救い、罪の赦しを得て、天の御国に入る者となるという真の祝福にあずかる者とされたのです。

次にもう一人の会堂司に関する方を見て行きます。23節でイエス様が彼の家に着くと、そこには笛吹く者たちや騒いでいる群衆がいました。笛吹く者たちとは当時の葬式屋のことです。これに泣き女と呼ばれる人々が加わって悲しいムードを盛り立てていました。イエス様はそこにいた人々に「出て行きなさい。その少女は眠っているだけです。」と言います。もちろん、この少女は普通の意味では死んでいました。しかしイエス様がこれからなされることから見れば、この死は一時的なものに過ぎず、そういう意味で「眠っている」と言われた。しかし人々は、そんなイエス様の言葉を聞いて嘲笑います。死んでいなければまだ望みはあります。でも少女はもう死んだのです。元には戻れません。今さら何をしても無理です。なのに、その少女をまだ見てもいないイエス様が「死んだのではない。眠っているのです。」などと語ることはバカげた発言である。何を言っているか！と呆れて一笑に付すしかない発言だと彼らは受け取ったわけです。

マタイは他の記事と同様ここでも簡潔に記しています。イエス様は25節で群衆を外に出し、ご自分が中に入り、死んで横たわっていた少女の手をお取りになりました。すると彼女は何と起き上がります！イエス様の手から命が注ぎ込まれたかのように、12歳の少女はいのちへと戻ったのです。最後の節にある通り、この話がその地方全体に広まったのも当然のことです。

さて私たちが覚えておいて良いことは、イエス様が死人を生き返らされた出来事はそう多くはないということです。今日の箇所以外にはルカの福音書7章に出て来るナインのやもめの息子の生き返りと、ヨハネの福音書11章のラザロの生き返りくらいです。イエス様はしようと思えばこのことができたのですから、その気なら何百回、何千回とすることができました。しかし実際には何度もしたわけではありませんでした。これをご自分の活動のメインとはされませんでした。つまりこれはある重要な真理を示すとい

う目的のために行われたことだったということです。それは何でしょうか。それはイエス様にあっては、死が私たちが行き着く最終ゴールでないということを私たちに示すことです。人は生まれて、最後は死ぬ。これが私たちが見ているこの世の現実です。最後の死に至っていなければ、人間はそのいのちを伸ばすため、色々なことに取り組みます。しかし一旦死んでしまったなら、もはや万事休す。逆戻りはできません。死の前ではすべての人は無力です。人間は黙ってこの圧倒的な死の力の前に服さざるを得ない。そう思っています。ところが何とここにその死よりも強い方がおられます！ 私たちの上に圧倒的な力を持つ死の上に、さらに勝る権威を持つ方がいる。これまでもイエス様が持つ様々な権威が記されて来ました。病の上にも権威を持つイエス様。自然界の力の上にも権威を持つイエス様。目に見えない霊の世界の上にも権威を持つイエス様。また罪を赦す権威を持つイエス様。そしてさらにここに人類の最大の敵とも言える死の上にも権威を持つというイエス様の驚くべき姿が示されているのです。

なぜイエス様にはその力があるのでしょうか。それはこれまでも繰り返し見て来た通り、イエス様の十字架の御業ゆえということです。イエス様は私たちに代わって十字架上で、私たちが受けるべき罪の呪いをすべてご自分の上に引き受けてくださいました。私たちに代わって、その苦しみと罰を極みまで受けてくださいました。そのみわざを通して私たちの上にあった罪の呪いと力とを粉碎してくださるのです。そしてご自身、その戦いを成し遂げて、三日目に復活されます。そのようにして死の力を打ち破り、いのちをもたらす救い主となられることを、イエス様はこのような形で前もって示されたのです。このイエス様により頼む者は、死の上にも権威を持ちたもうイエス様によって、死で終わらないいのち、永遠のいのちに生かしていただくことができるのです。

自分にとって死はまだまだ先の問題だと考えている人にとって、この死についての話はあまりピンと来ないかも知れません。しかし最近、身近な家族の中に、愛する人の中に死んだ人がいるという経験を持っている人、あるいは自分自身の死が近いと意識している人にとって、この箇所は特別なメッセージを語ってくれるものと思います。私たちは自分自身をこの会堂司、他の福音書ではヤイロと呼ばれている人の立場においてみればどうでしょうか。愛する一人娘が自分よりも先に死に、人生のすべての喜びが失われたような状態にありました。しかしその自分から失われた愛するわが子がいのちへと戻って来た！ 動かなくなっていた愛娘が息を吹き返し、目をぱつぱつと開け、すっと起き上がり、いつものように食事をし、コミュニケーションすることができる。これほど

の幸いがヤイロにとって他に考えられるでしょうか。しかし私たちが同時に考えるべきは、この少女はこの時、イエス様によって生き返らされましたが、やがてもう一度死ぬ日が来るということです。その時、その親はまたイエス様のところに走って行って生き返らせていただくこと求めるべきでしょうか。あるいは自分が死にそうになったら誰かをイエス様に遣わして、死なないようにしてもらうべきでしょうか。そうしていつまでもこの地上に生き続けることが救いなのでしょうか。そうではないと思います。もちろんイエス様がそばにおられれば、イエス様にまたお願いしても良いかもしれません。しかしこの会堂司ヤイロの一家は、この経験を通してもっと深い慰めのメッセージを受け取ったと思います。すなわちイエス様を信じる者にとって死は終わりではないのだということ。イエス様は死の上にも絶対的な力を持っておられる方。イエス様ご自身、復活されました。ですからたとえ地上で定められた自分の生涯が終わって死ぬ日が来ても、その死の上にも権威を持ちたもうイエス様に信頼して行けば良い。その方は死よりも強い方として私を死のただ中にもあっても究極的な意味で守り、私を永遠のいのち、天の御国の祝福に生かしてください。そして同じく主に信頼する愛する者たちをもそのように導き、天の御国で私たちは再び相まみえて永遠にともに歩むことができるようにしてください。と。

私たちは地上の人生をどのように歩む者でしょうか。今日の説教題は「絶望か、希望か」とつけさせていただきました。地上の人生を歩む中で、私たちは絶望に屈しそうになる時があるものです。今日の箇所に出てきた二人もそうでした。厳しい現実を前にして、もう絶望の道を行くしかないとも思われました。しかし彼らはイエス様に思いを向け、イエス様のところへ行って、彼らの思いを超えた救いの祝福の世界に生かされました。私たちも自分の生活には絶望しかないと思う時があるものです。人間関係においてそうかもしれません。家族との関係、また職場での関係において。あるいは病気の問題において。あるいは罪の問題において・・・。そんな私たちの前には実は二つの道があります。一つは絶望の道をそのまま悲しみ嘆きながら進むことです。しかしどんな人にももう一つの道が開かれています。それは希望の道です。それはイエス様のところへ逃れて行くことです。そのために私の信仰は完全でなくてはならないわけではない。不十分な点や欠けがあっても良いのです。真にイエス様を求めて近づくなれば、イエス様はそこに信仰を認めてくださり、それでよし！としてくださり、新しい祝福の世界、恵みの世界を開いてくださる。もう一度覚えたいことは、イエス様は死の力よりもはるかに強い方だということです。私たちを悲しみと嘆きに追いやる究極的な敵である死よりも強

い方が、私たちのためにいてくださいます。その方のところへ逃れて行くなら、私たちにも常に希望の歩みがあります。今日の箇所の二人のように、イエス様のところへ行って、永遠の命へと向かう真に幸いな道、救いの道を歩ませていただきたいと思うのです。